

**第5回 那賀川左岸堤防地震・津波対策事業環境回復モニタリング委員会
議事概要**

1. 日 時：平成29年1月27日（金）14：00～16：00

2. 場 所：阿南プラザホテル 2階 大ホール（鶴の間）
徳島県阿南市富岡町滝の下24－8

3. 出席委員：

湯城 豊勝 委員長（阿南工業高等専門学校 名誉教授）
乾 隆帝 委員（山口大学大学院 創成科学研究科 助教（特命））
大田 直友 委員（阿南工業高等専門学校 創造技術工学科 准教授）
河口 洋一 委員（徳島大学大学院 理工学研究部 准教授）
木下 覺 委員（徳島県植物研究会 会長）
佐藤 陽一 委員（徳島県立博物館 自然課長）
森本 康滋 委員（徳島県自然保護協会 会長）
（武藤 裕則 委員（徳島大学大学院 理工学研究部 教授）欠席）

4. 配付資料：

資料-1 議事次第、配席図、委員会規約
資料-2 委員会資料
資料-3 委員会用参考資料

5. 議 事：

- （1）地震・津波対策事業について
- （2）環境モニタリング調査について
- （3）環境保全対策の結果について
- （4）今後のスケジュール

6. 議事要旨：

(1) 地震・津波対策事業について

特に意見なし。

(2) 環境モニタリング調査について

①平成 26 年度及び平成 27 年度に 2 年連続して大きな出水があったため、泥分の多い底質を好むマングローブテッポウエビなどを起点とするような生態系を構成するツマグロスジハゼ、環境が安定してから出てくるヒロクチカノコガイなどが戻っていない。幼生の加入が卓越するようなタイミングがあれば、一気に増える可能性がある。

②シオマネキは代償地では順調に回復している。甲幅 30mm 以上の大きな個体は、今年度まだ確認されておらず、確認されるまでにあと 1・2 年かかると考えられるが、最後のワンステップまで来ている。シオマネキの大きな個体は現場の生き活きとした象徴のようなものであり、確認された時点で評価が終了すると考えている。

③植物は、代償地を創出した低いところにヨシ、一段高いところにはアイアシが分布している。また、その他ヒメヨモギやナガミノオニシバも生育しており、これらは河口の重要な植生であることから、今後の調査ではもう少し細かい植生調査を行うことが望まれる。

(3) 環境保全対策の結果について

①代償地 1 は平成 27 年度に実施した地盤高及び底質の改善によって、順調に生物が回復している。しかし、底質調査の経年変化をみると今後泥分が減少していくおそれがあることから、泥の投入が必要になると思われる。流域内で工事や浚渫等により代償地に適した底質の泥が発生した場合には、速やかに委員に相談しアドバイスを受けて代償地の上流側に置土するなど、持続的に泥を供給できるシステムづくりが望まれる。

②代償地 2 の環境は安定しており、生物の回復も順調に進んでいる。しかしながら今後ヨシ原が広がり過ぎて、裸地がなくなること懸念される。シオマネキはヨシ原の周囲に多いという研究結果があるため、今後ヨシを刈るなどのコントロールが必要になるかもしれない。

③今回の保全対策は非常に良い取り組みであり、丁寧に取り組んだ分がきちんと成果として出てきている。願わくば、下流側の堤防工事が始まる前に干潟への影響検討や代償地の創出を行っていれば、更に良い成果が得られたことも考えられる。代償地づくりなどの保全対策は事前の計画の段階で取り組んだほうがよい。このことを共有し今後実施するように努めていただきたい。

(4) 今後のスケジュール

①生物調査は、委員の研究で実施している調査と河川水辺の国勢調査における調査地点の追加等により、今後の変化を確認していくとよい。

②干潟の地形や底質は生物の生息環境の基盤となる重要な要素であることから、今後もドローンを活用した航空写真撮影による効率的な微地形の把握や底質調査を継続することが望まれる。

③今後のモニタリング調査を確実に継続していくため、今年度中に調査項目の検討を行い、調査計画を策定しておくことが必要であると考えられる。

(5) 総括

①那賀川下流左岸環境回復モニタリング委員会は、委員会の目的を概ね達成できたため、今回の委員会を持って終了とする。

②汽水域の干潟の再生などの取り組みできちんと評価している事例は少ない。また防災対策の事業の中で環境への取り組みをしっかりと実施している事例も少ない。今回の那賀川の実例はこの両方に当てはまるため、国土交通省の中だけでなく、学会、一般の方にも情報を公開し、PRしていくことが望まれる。

以上の議事を踏まえ、今年度のモニタリング調査結果及び環境保全対策の結果、今後のスケジュールは了承された。

以 上